先輩たちの『現在』の姿

人生の転換期はたくさんある

＜主婦 高取加奈さん（福岡県）＝平成19年度卒 佐藤淳介ゼミ出身＞

明るくて、優しい笑顔が印象的だ。現在は福岡県内に在住し、子育てに奮闘中の主婦である。芸短卒業後、大分銀行に就職し、１年後に子どもを授かり退職、結婚した。「結婚して良かったですね」と語る。

学生時代は心理学に関心を持ち、特に体験型の授業に熱心に取り込んだ。「子育てをしていく中で、授業で教わったことが役立っています」。結婚生活、子育ては楽しく、充実した日々を送っている。母親として大変なこともあるが、「家族のためなら、がんばれます」と笑顔を絶やさない。

「就職活動をしていた時は『今がすべて』と思っていたが、結婚を機に『人生の転換期はたくさんある』と感じた」という。「人生の修正は何度でもきく。その時その時を一生懸命生きることが大切です。後悔はありません」。後輩の学生たちに向けて、体験に基づく貴重なメッセージを送ってくれた。

「今は子どもが元気に大きくなってほしい。ただそれだけです」。慈愛の眼差しをお子さんに向けながら、とてもはつらつとしていた。（文と写真・森本絵美莉）

恵まれた環境で将来を見つける

＜セラピスト 安土かほりさん（別府市）＝平成13年度卒 藤田文ゼミ出身＞

芸短大を卒業後、別府大に進学、さらに同大学院で勉強して臨床心理士の資格を取った。院を修了後、別府市の児童養護施設「光の園」でセラピストとして、子どもたちと向き合う毎日だ。今年で５年目になる。

ほんわかとした柔らかい印象の女性である。「癒し系」という言葉が似合う。卒業研究は「児童虐待」だったという。「バイトにも精を出して、レストランのホールを２年間勤めました」

セラピストになった理由は？「人に関わる仕事がしたかったんです。特に子どもの心理ケアにかかわる仕事をしたいと‥」。子供たちは一人一人がそれぞれの課題を抱えている。その子たちとしっかり向き合い、成長を支援する。「ささいなことでも前向きな変化が見られた時がいちばんうれしいですね」と、微笑みながら語る。

在学生にメッセージを。「芸短は本当に幅広く学べる場所です。恵まれた環境だということを、卒業してから気がつきました。短大生活の中で、自分の将来を見つけてほしい」（文と写真・中村早希）

２年間は大切な時間だった

＜エステティシャン 宮本瞳さん（宇佐市）＝平成18年度卒 関口洋美ゼミ出身＞

「自宅に帰り着くのは、夜９時を過ぎる。でも、やりたかったことだし、やりがいがある仕事だから」。芸短を卒業後、美容の専門学校に２年通った。現在はエステティシャンだ。

「入学当時から短大を辞めて、専門学校に行こうかと迷っていた」という。しかし、興味のある講義やたくさんの経験、多くの人と出会う中で、大学での時間はとても大切なものに変わっていった。

「芸短は専門学校や一般社会とは違う。別の空気が流れている。自分と向き合える時間がある。２年間の中でしかできないことも多くできた。芸短に行って良かった。芸短で過ごした２年間が、知識や成長につながって、今の私がある」

仕事は、フェイシャルエステや接客を中心に行っている。お客様一人ひとりに対して、カウンセリングをし、次に技術を行い、エステ後は食事や運動などについて一緒に考える。そんなトータルケアを行う毎日だ。

「お客様に喜んでもらえることが何よりですね。これからはもっと仕事を極めて、将来は子どもや高齢者にエステと関連したことをして、役に立ちたい」（文と写真・森本絵美莉）

学生たちのオアシス

＜アパレル店長 難波香さん（大分市）＝平成14年度卒 吉良伸一ゼミ出身＞

短大卒業後、アパレル会社ファイブフォックスに入社し、勤続８年目を迎えた。現在、ＢＡＳＩＬＥ２８の店長を勤めている。初めてお会いした時、おしゃれでとても優しい印象を受けた。短大時代の友人達の中では、あまり怒ったところを見たことがなく、皆のオアシス的存在だったそうだ。

短大時代、湯布院映画祭にボランティアとして積極的に参加していた。その活動は、卒業後も２年間にわたって続いた。本人はボランティアというより、好きで参加していたそうだ。そして卒業後、秘書実務やパソコン操作、書類書きなどの授業が役に立ったそうだ。

「将来、食堂をしたい。誰でも入りやすくて、夜まで定食を食べられるようなお店。一緒に陶器や雑貨なども売れたらいいな。」と彼女はこれからの人生の夢を話していた。（文と写真・佐藤明日美）

取得した資格が役立つ

＜銀行員 栗山怜奈さん（大分市）＝平成19年度卒 藤田文ゼミ出身＞

趣味は友達と遊ぶことだった。よく一緒に旅行に行った。１年の２月から就活を始めた。２年生で秘書検定２級を取得した。

色々な人と接する職業を希望し、豊和銀行を志す。念願通り、豊和銀行に入行。４年後に、本部秘書室に異動した。現在は渉外を担当している。

「入行当初は研修結果を活かせず、何も出来ない自分に涙することもありました。秘書室に異動になった時は、短大時代に取得した資格がこんなに役に立つとは思わなかった」と語る。

「この芸短に入学してなかったら、秘書の資格を取得していなかったし、自分は今の仕事に就いてなかったと思う。芸短に入学して本当によかったです」。（文・山元泰幸）

何事にも挑戦

＜大分ケーブルテレコム 松尾美幸さん（大分市）＝平成21年度卒 下川正晴ゼミ出身＞

芸短大を卒業後、制作として大分ケーブルテレコムに入社。勤続1年目の新米社会人だ。「何事にも挑戦する」。松尾さんが芸短時代に心がけたことである。特に「日韓次世代交流映画祭」の司会を担当したことは、大きな意味があった。「度胸や自信がついた。表現することの楽しさと難しさを学べた」。映画祭は確実に、彼女を成長へと導いていった。

映画祭をきっかけに２年間で３回、韓国へ足を運んだという。彼女はソウル市立大でルームメイトだった韓国人学生と今でも手紙やメールのやりとりをしている。韓国という異国での体験を通して、視野が広がったと語る。

「大分の良さや両親の有難みも改めて感じました。ケーブルテレビ局でも、何事にも挑戦し続ける気持ちで頑張っています」。自分の心境を笑顔で話してくれた。私自身も、いつまでも挑戦し続ける人間でいたい。（文と写真・森本絵美莉）

写真左：松尾美幸、写真右：第2回日韓次世代交流映画祭ゲストのアン・ソンギさん